

「東京大学・ソウル大学討論会」報告書

日本語チーム 2

東京大学公共政策学教育部公共政策学専攻 2 年

山田悠生

<日本語>

去る 7 月 31 日、東京大学本郷キャンパスで開催されたソウル大学校との討論イベント SNU in Tokyo に参加した。韓国語を勉強したこともなく、韓流ドラマを観たこともない私の参加動機はいたって単純で、討論会の直前まで中国の北京大学に留学することが応募の時点で決まっていたため、それとあわせて日中韓の学生と深い話をする機会が持てると期待したためであった。

2 つに分かれた日本語チームの討論テーマはいずれも日本の極右団体による主に在日韓国人に対するヘイトスピーチに関するもので、日韓両国の学生がいかにこの問題に注目しているかが伺えた。

私の属したチームでは、まずソウル大の学生 2 名からプレゼンテーションが行われ、日本の嫌韓的言説の背景、表現の自由からみたヘイトスピーチ規制の必要性、ヘイトスピーチが日韓関係にもたらす影響などの論点が出されたため、概ねそれらのポイントについて議論がなされたが、一部プレゼンに留まらない観点での議論にも至った。以下、ポイントごとに略述する。

・日本の嫌韓的言説の背景

ソウル側からは、日本人が嫌韓的言説をどのように捉えているのかという問いかけがなされ、東大生の認識としてはヘイトスピーチを行うのはごく一部の政治的、思想的に急進化した集団であり、決して社会のメインストリームたりえないと主張した。それでも、韓国メディアを通じて、かかる嫌韓的言説が日本である程度市民権を得ているように見え、それが両国の関係悪化につながることを警戒するとともに、彼らが個人的に知る日本人のイメージとあまりに乖離していることに奇妙さを覚えるというコメントがあった。東大生からは、ヘイトスピーチないし愛国的風説の興隆には俗に「失われた 20 年」と言われる日本の経済的停滞や、低い投票率にみられる日本人の政治意識の低さが、政治家にとって極右勢力を動員するインセンティブになっていることなどが嫌韓的言説の政治社会的背景として挙げられたほか、日韓関係に由来する背景として韓国の朴大統領の政治戦略、歴史問題の顕在化などが話し合われた。

・ヘイトスピーチを解決するには

ヘイトスピーチの解決ないし緩和ということについては、東大、ソウル大それぞれで法規制の必要／不必要で意見が分かれた。立法による規制が必要だとする学生は、ヘイトス

スピーチやヘイトクライム自体の在日韓国人等に与える精神的、物理的被害を問題視するとともに、日本がヘイトスピーチを放置していることは自由民主主義をとる法治国家の名譽を傷つけ、他国からの評判を毀損するものであるという論拠に立った。他方法規制を不必要とする学生たちは、法規制が表現の自由の抑圧につながることに、極右勢力の反動を招きかねないこと、法規制以外の有効な手段がありうることを主張した。なおその他の有効な手段として、文化交流などを通じて日韓の人々がお互いをよく知ることなどが挙げられた。議論の焦点は若い世代の台頭への期待と、その土壌となる政治参加の重要性に移った。

・日韓の若者の政治参加の違い

韓国側から、韓国の学生が日本と比べて政治参加に積極的であることが説明された。芸能人などもブログや SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)を通じて選挙への投票に言及したり、政治的意見の発信を行ったりしているオープンネスは、政治について語ることが一般的に肯定的とみなされない日本の若者の価値観と大いに異なっており、私含め東大の学生は驚くことしきりであった。

・所感

以上の議論を通じて受けた印象としては、主に 2 つある。まず、両国の学生ともリベラルで、異なる意見も寛容に受け入れていたことである。ヘイトスピーチという、日韓の歴史認識問題にも関わるセンシティブなテーマの討論であり、一部の学生からは「冷静な議論が成り立つだろうか」と心配する声も聞かれたが、蓋を開けてみると相互の立場、主張を尊重して活発な意見交換が成立していた。もちろんソウル大の学生が日本側に阿っていたわけではなく、韓国の学生の赤裸々な意見を聞くことができたことは私にとって願ってもないことであった。もう 1 つは反省点になるが、十分な議論を行うには時間が短すぎたと感じる。討議の時間の少くない割合が、“日本の現状はこう”“韓国の現状はこう”と事実情報を共有することに費やされてしまい、一つ一つの争点について掘り下げたディスカッションが十分にできたかという疑問が残る。日韓で事前にテーマを打ち合わせてトピックを絞ったり、前提知識を共有しておいたりするなど、工夫が必要だった。

それでも、本プログラムはまさに私たちのテーマで話された両国の友好的交流に大いに貢献したと断言できる。討論会では真面目な議論に花を咲かせていた学生たちも、その後の懇親会では和気藹々とした雰囲気の中で友好を深めることができた。ちょうどこの 7 月初頭、朝鮮学校と政治団体「在特会」の間で争われた裁判において大阪高裁は、在特会のヘイトスピーチ行為は人種差別にあたるとして学校周辺での街宣禁止と 1200 万円の賠償金支払いを命じた 1 審判決を支持する判決を出した。高裁レベルで憎悪表現が扱われた初の判決として注目されたが、在特会は上告する方針を見せており¹、判決確定にははまだ時間がかか

¹ 朝日新聞 7 月 8 日「ヘイトスピーチ「街宣差し止め」一審支持 朝鮮学校妨害」

りそうな様相である。このようにヘイトスピーチ問題は根深く、容易に解決を許さない重大な問題だが、活発に議論を交わす日韓の学生を見ていると、粘り強い対話と相互理解によって、乗り越えられるのではないかという期待感を覚え、自分もその学生の一人として、責任感をもってこの問題を考え続け、取り組まねばならないと決意を新たにすることができた。

<English>

On July 31th, the 2nd SNU in Tokyo Discussion Program 2014 took place at Hongo Campus, University of Tokyo. I applied to this program just because I expected to talk with Korean students of political issues. Right before the program, I came back from Peking University, China, so I could get chances fully to dialogue with Asian developed countries' excellent students.

I belonged to Japanese group and talked of hate speech against Korean which is getting intensified in Japan. The background of hate speech, how to cope with it, the difference between Japanese/Korean youth in political participation, and so on were discussed.

I want to take two impressive things I received through the discussion. the first thing is the hospitability of both sides students to accept even contrary opinions. I would be liar if we never worried about get it overheated. However, we could discuss with mutual respect of arguments and standpoints. The second one is shortage of time for sufficient discussion. We should have shared prerequisite knowledge and topics to avoid spending much time for sharing of facts.

Nevertheless, I am strongly confident that this discussion program contributed to friendly interaction between Japanese/Korean students. Tenacious dialogue and mutual understanding among the students, including me, is the remedy for dealing with Hatespeech even though it is the case at the bar, and hard to resolve. I made up my mind aflesh to keep considering this issue with responsibility.

冷静なソウル大学学生

日本語チーム 1

東京大学大学院教育学研究科 修士課程 3年

幾田英夫

去る7月31日、去年に引き続き今年もソウル大学から31名の学生が来日、東京大学との学生討論会が開催された。今回も筆者はそのイベントに参加することができて幸運であった。

ここでは、事後報告として、筆者の所属した日本語チームの様子を中心として気持ちのおもむくままに書いていきたい。



去年はなごやかに学生討論会が終わったが、今年は討論のために事前に設定された題がナショナリズムを煽る内容であり、とても緊張した。6月26日には在日韓国大使館の見学に参加し、大使館の方からは「日本人は戦前戦中の歴史についてもっと勉強してほしい」と講義を受けたばかりであった。なので、今回の日本語チームのテーマが『私たちはネトウヨとどう向き合うべきか?』であると聞き、今回は無事では済まないのでは、というのが討論会前日までの正直な気持ちであった。

討論会では、まず全体会として、英語・韓国語・日本語の各チームではどのようなことを話題として話し合うのか、各チームから趣旨説明があった。

日本語チームではないが、趣旨説明のときに別の言語のチームから出てきたプレゼン画面のひとコマには少しぎょっとした。「安倍総理は右寄りの言動が目立つと言われるが、これはいくらなんでもやりすぎではないか。これじゃ韓国から見て、日本は仮想敵国そのものじゃないか。前途多難な討論会になりそうだ。今回は荒れるかもしれない・・・。」

冷静にもものを見る韓国の大学生

ところが班別に分かれ、日本語チームで話を始めると、これまでの感覚が杞憂であったことに気がついた。討論している内容はナショナリズム的かも知れないが、ソウル大

学の学生は冷静に物事を見ていることがわかったからだ。

日本にも韓国にも右翼的な人はいる。行動が過激なので印象に残りやすく、記事にもなりやすい。そういう記事を読むといつの間にか全国民がそのような右翼的なものの見方をしているかのように思ってしまう。かくして本当にお互いに相手の国が嫌いになる。・・・しかし、韓国では若者は相当冷静に世の中を見ているようだ。「日本人がすべてあのような政治家みたいな考えだとは思っていない。」日本語チームのソウル大学の学生の人たちの共通認識とのことだ。

この冷静なものの見方は、今回の討論会で私たちが最も学ぶべき態度であるような気がした。日本では他人と外れた考え方や行動は嫌われるため、他人に合わせようとする。考え方については、日常のマスコミから影響を受ける。日本ではマスコミが国民感情を作っていると言ってよいのではないか。これに対し、韓国では他人に自分を合わせようとする国民性はほとんど無く、主体性をもって取捨選択しているであろう。韓国はネット社会である。新聞も紙で読むものではなく、スマホなどネットで読むのが普通とのこと。ネットだとマスコミが取り上げない事実も載せられる。もちろんネットの記事の真偽というのは相当に怪しい。しかし、韓国ではニュースはネットで見るのが主流であるため、ふだんからニュースの真偽は自分たちの頭で考えている。

冷静に世の中を見ていることについては木宮先生からも最後のあいさつで指摘されていた。

では、ネトウヨのはびこることを是正するためにどうすれば良いか話し合った。

韓国側からはネトウヨについて、彼らはまともな歴史教育を受けてこなかったのではないか。だからこそこれほどまでに韓国人に対して敵対的になって平気なのではないか、との指摘があった。

対策として、日本側から、日韓共通の歴史教科書を作って同じ本で歴史を学べば誤解も減ってお互い分かり合えるのではないかと意見が出たが、これについては韓国の反応は明確にNOであった。歴史は自国民の書いたもので学ばなければならない、そうしないと長期的には国益を損なうというニュアンスの返答をもらった。



討論会のあとは、福武ホールの隣で韓国料理を食べながら懇親会があった。私はおいしかったがソウル大学の学生は「おいしくてありがたいが、日本に来てまで韓国料理を食べることになるとは思わなかった。できることなら日本料理を食べてみたかった。」とのこと。

懇親会では名札に会話可能言語を貼ったシールを手がかりにソウル大学の学生に話しかけたりしたのであるが、今回のプログラムで東大に来られたソウル大学学生は、それなりに日本語が話せる人がほとんどであった。なのであまり言語を気にせず話しかけたりすることができた。

懇親会のあと、日本語チームで 2 次会に行こうということになり、本郷三丁目駅すぐの『さくら水産』に行ったのであるが、英語・韓国語チームも偶然同じ店で 2 次会ということなり、店をほとんど貸切状態にして 23 時頃まで飲み続けた。

結局、終わってみればソウル大学の学生の皆さんと色々な話ができ本当に楽しい一日を過ごすことができたという充実感でいっぱいであった。

今回のイベントについては、東大現代韓国研究センターやソウル大学の皆様の強いご支援のもとに実現したものであります。日韓友好のいい機会を提供していただき、本当にありがとうございました。

<日本語>

「東京大学・ソウル大学討論会」報告書

韓国語チーム 1

東京大学経済学部経営学科 3年

趙智賢

韓国の家庭教育で育ち、日本の学校教育に通い続けた身として、両国の関係には必然的に興味を抱くようになっていた。学内で開催される本プログラムのように貴重な国際交流の機会には積極的に参加するようにしている。私はこの討論会プログラムには初回開催であった昨年度も参加した。日韓の学生が討論の場を持てる貴重な機会であることに加え、その後の交流からも得るものが多く、今年度も参加することになった。

今年度は韓国語グループの東大側代表として連絡係等を勤めたが、議論をするにあたり、ソウル大生との衝突を危惧している東大生は昨年同様に多かった。議題について率直に話し合いたいものの、その中で意図せず政治的・歴史的に刺激を与えるような発言をしてしまわないか、軽い一言から誤解を生んでしまわないか、普段日常の会話よりも意識的に注意する学生も多かった。両国の現在の不和な情勢が表れているようで悲しく感じる一方、それでもなお韓国との交流に興味をもつ学生が参加し、自ら先入観をもたないように努め、直接の交流を望む姿勢は嬉しく、両国の未来に希望があるように感じた。

東大側の学部生は学期末試験期間中ということもあり、語学的・知識的な準備不足から不安を感じつつ当日に臨む、あるいは参加をためらった学生も多かったことと思う。東大のグローバル化により国際的な学期のずれ等が徐々に縮まり、このような交流活動に今後より参加し易くなることを期待する。以上の経緯により、一部の学生が討論から取り残されそうになる場面もしばしばあったが、その都度互いにフォローし合いながら討論は順調に進められた。また、その不自由さがあるからこそ、かえって互いに思いやりながら討論を進められた面もあるだろう。

韓国語グループは「漢字教育」「韓流ブーム」「三放問題」の三つの議題を扱い、少人数に分かれて討論を行った。テーマごとの少人数に分かれたことで個々の意見が言いやすくなり、昨年度よりも具体的な討論が進められた。椅子を円形に寄せ合い、自分の考えを伝えようと積極的に両国の学生が話し合う姿勢は感動的であった。互いに同じ大学生だからこそ、失敗を恐れずに率直な討論を行うことができた。

私が参加した「漢字教育」の討論では、まず東大側の希望者による日韓漢字教育の比較についての発表が行われ「訓読み教育を普及させてはどうか」という提案がなされた。現韓国の漢字教育でも生活に不自由は無く、改めて訓読み教育を導入する必要性は乏しいと感じる韓国人学生に対し、訓読みを自然に教育された日本人学生とは感覚に近い認識の違いが現れた。ただ、双方ともエリート層の教養として漢字教育が必要であるとの認識は

一致した。中国人留學生が参加していたこともあり、討論の内容は徐々に「中華圏・東アジア文化圏での共通言語としての漢字」に移っていった。ここでも中華圏に対する考えは学生ごとに差が出たものの、東アジア文化圏としての未来について考える流れとなった。相手を知ると共に、自分たちの立場を改めて考える良い機会になったと思う。また、このような議題を話す際、英語ではなく、両国の言語を用いることができる本討論会は素晴らしい場であると感じた。繊細な話題になればなるほど、他言語では文化的に表現しきれない、あるいは誤解を招きやすい表現を、直接的に討論できる貴重な場であった。

討論会後の食事会では兵役や留学、それぞれの国の文化等、討論時間では話せなかった互いに「気になる」ことについて楽しく話すことができた。直接交流することで誤解は生じにくく、また自らがいかに「井の中の蛙」状態であるかを認識させられるこのような機会は非常に大切である。東大側は学部生以上の、韓国文化を専門の一端にもつ院生の参加者が目立っていた。これは現在の東大生ひいては一般的な日本人学生の日韓関係に対する興味・認識の薄さが浮き出ているように感じた。日韓関係に多少なり興味を持った学生が、その少しの興味を直接的行動に結びつけるツールとなる本討論会の開催は非常に重要であると感じている。このような交流の場がもたれ続けることを望む。

<한국어>

SNU in Tokyo, Discussion Program 2014 보고서

한국어

동경대학 경제학부 경영학과 3학년

조지현

가정에서는 한국 문화 환경에 있으며 일본에서 학교를 다닌 나로서는 한일 양국 관계에 필연적으로 관심을 가지게 되었다. 학교에서 개최되는 본 프로그램과 같은 국제 교류의 기회가 있으면 적극적으로 참가하려고 노력하고 있다. 나는 이 토론회에는 첫 개최회였던 작년에도 참가했는데 한일 양국 학생이 토론할 수 있는 귀중한 기회였고 그 후에 교류에서도 얻은점이 많았기에 올해도 참가하게 되었다.

올해는 한국어 그룹의 동경대쪽 대표로 사전연락등을 맡았는데 토론을 하는데 있어 서울대생과의 충돌을 염려하는 동경대생은 작년과 변함없이 많았다. 솔직한 토론을 원하면서도 그 안에서 의도하지 않는 정치적 역사적으로 자극적인 발언을 하게 되지는 않을까, 가벼운 한 말이 오해를 사지는 않을까, 평상시 회화보다도 의식적으로 주의하는 학생도 많았다. 현재 한일에 불화한 정세가 나타나 있는것 같아 슬프게 느끼는 반면 그런 상황에서도 한국과의 교류에 흥미를 가진 학생이 참가해 스스로 선입견을 갖지 않으려고 노력하며 직접적인 교류를 원하는 자세는 기쁘고 양국의

미래에 희망이 있다고 느꼈다.

동경대의 학부생은 학기말 시험 기간이었기 때문에 어학면이나 지식면의 준비를 할 시간이 부족해 불안한 마음으로 토론회에 참가하거나 참가를 망설인 학생도 많았다고 생각한다. 동경대의 그로벌화가 진전되어 학기의 시기 차가 점차 개선되 이러한 국제교류에 참가하기 쉽게 되기를 기대한다. 이러한 동경대의 사정으로 일부 동경대 학생이 토론회에서 적극적으로 자기 의견을 주장하지 못 할때도 있었지만 그 불완전함이 있었기에 더욱 서로의 입장을 존중하는 상호 이해로 발전되 토론은 순조롭게 진행되었다.

한국어 그룹은 「한자 교육」, 「한류 붐」, 「삼방 문제」를 테마로 소인수로 나누어 토론을 진행했다. 테마 별로 소인수 토론회를 가진 것은 개인적으로 의견을 나누기 좋은 분위기가 조성되 작년보다 구체적인 토론이 진행되었다. 의자를 돌려 앉아 적극적으로 자신의 생각을 전하려는 양국 학생의 자세는 감동적이었다. 서로 학생이었기에 실패를 두려워하지 않고 솔직한 토론을 진행할 수 있었다고 생각한다.

내가 참가한 「한자 교육」토론에서는 동경대의 한 학생으로부터 한일 한자 교육 비교에 관한 발표가 있었고 거기에서 혼독 교육을 보급하는 것은 어떤가라는 제안이 있었다. 그 제안에 대하여 현재 한국의 한자 교육은 생활에 불편함이 없으므로 혼독 교육의 필요성을 느끼지 못 한다는 한국인 학생에 대해서 혼독을 자연스럽게 교육받은 일본 학생과의 무의식적인 인식 차가 나타났다. 단 양국 학생 모두가 엘리트층의 교양으로서 한자 교육은 필요하다는 공통 인식을 보였다. 중국 유학생도 참가했기 때문에 토론 내용은 서서히 「중화권과 동 아시아 문화권의 공통 언어로서의 한자」로 확대되었다. 거기에서도 중화권에 대한 학생들의 인식은 서로 달랐지만 동 아시아 문화권으로서 미래에 대해 생각하는 방향으로 토론은 진행되었다. 상대방을 이해하고 자신의 입장을 다시 한번 되돌아 볼 수 있는 좋은 기회가 되었다고 생각한다. 이와 같은 토론을 전개할 때 영어가 아닌 양국의 언어로 진행된 본 토론회는 정말 멋진 토론회가 되었다고 느꼈다. 타국어로는 정확하게 표현할 수 없는 민감한 표현과 오해를 살 수 있는 표현도 상대방의 언어로 직접 토론할 수 있었던 귀중한 모임이 되었다.

토론회를 마치고 함께 한 회식에서는 병역 문제나 유학 그리고 토론회에서는 이야기 하지 못한 상호의 문화 등 궁금했던 부분에 대해서도 즐겁게 이야기를 나눌 수 있었다. 직접적인 교류는 오해가 적고 자기 자신의 지식과 인식의 부족함을 깨닫게 해주는 귀중한 기회이다. 토론회의 동경대학 참가자는 대학생보다 한국 문화를 전공하는 대학원생의 참가가 많았다. 이것은 현재의 동경대학생 넓게는 일반적인 일본학생이 한일 관계에 대한 흥미와 관심이 희박하다는 일면이 나타났다고도 느꼈다. 한일 관계에 조금이라도 흥미를 가지고 있는 학생이 그러한 흥미를 행동으로 발전시킬 수 있는 계기가 되는 본 토론회의 개최는 대단히 중요하다고 느끼고 있다. 이러한 교류의 기회가 앞으로도 계속되기를 바란다.

「東京大学・ソウル大学討論会」報告書

英語チーム 1

東京大学教養学部文科二類 1年

岡庭 晴

<日本語>

English 1 グループでは、「今日の東アジアにおいてどれほどの軍備が正当化されるのか」をテーマに討論を行った。理想としては、軍備が一切必要ないことであると言う全員の合意を確認した。一方、より現実的にこの問いを考えるにあたっては、異なる論点や軍備方法、様々なアクターの分析が必要となった。討論では、参加者の興味関心や知識、日韓の軍備の違いに基づいて、徴兵制、集団的自衛権、市民の政治参加と領土問題の4つの具体的な分野を主に扱った。

恐らく現実としては、軍事的侵略の可能性が否めないため、軍備が必要だと言う合意がなされた。軍事力を確保するためには、それによって安全が侵されかねない、兵士が不可欠だ。議論を醸す、兵士の採用方法について考えた。韓国は日本と異なり、現在徴兵制がある。徴兵は韓国学生にとって、早い人では来年控える苦難だという。徴兵期間は2年。この期間に若者のカップルの多くが別れ、肉体的・精神的につらい生活を強いられるらしい。皆が平等に兵役をすることで、市民の責任意識や国民的連帯を促すのではないかと言う意見もあるが、高所得者等一部の国民は、賄賂などを通じて徴兵の辛さを味わわないという不信感も、韓国学生は皆感じていた。日本には徴兵制を導入しないことを勧める、という意見もあった。一方、徴兵制が嫌われているのに存続している現状については、北朝鮮との戦争が続いていること、そして兵士を募る財源が米国などの中にはないこと、そして兵役後には徴兵制の廃止を求めない人が多いことが挙げられた。志願兵制にすることで、貧しい人のほうがより兵役に就き、命を他国民のために犠牲にする傾向も指摘された。

また、日本の国家の安全保障に関しては、集団的自衛権の認知について韓国学生から意見を求められた。日本国内では集団的自衛権によるメリットが強調されている。国際貢献になる、在外日本国民を助けに行けるなどだ。一方、韓国や中国など、近隣諸国からすれば、それが軍事的脅威となり、さらなる軍備化を引き起こすのだという意見があった。マスメディアや国家による報道・教育が日韓など、国家により異なることが確認された。

そののち、日韓両国での軍事の差異から発展して、国家の意思決定の在り方について話しあった。一般的に、市民の政治への関心が日韓では異なるようだ。日本では政治の話題はタブーとみなされ、投票率も5割程度と少ない。選挙区制によるものか、政党のマニフェストよりも政治家個人の評価や家柄が投票結果に反映されることも多い。韓国学生はそれについてとても驚いており、韓国での市民の政治参加について述べた。投票率は7割程度と高く、政治については一般的に皆何らかの意見を持っており、人柄や家柄に基づいて政治家や政党を支持することは一般的ではないという。また、特に若者の政治参加につい

ては、日本では、学生は就職を意識して目立った社会運動への参加を嫌煙しているが、韓国では大きく異なる。毎週デモに参加する友人のいる韓国学生もいた。また、実際に米韓 F T A への反対デモに参加した韓国学生もいた。意外なことに韓国では、民間企業ではデモに参加して逮捕されたことが良く評価されることも普通にあるらしい。現在 40 代の人々が社会運動と深く関わっていた歴史的背景によるのかもしれない。日本では大人のデモ参加者も逮捕を恐れ、マスメディアもデモを報道しないが、韓国では老若男女、各市民の政治参加が比較的活発なようだ。

軍備化を支持するような現在の政治的傾向と関連して、日韓外交の焦点でもある領土問題も言及された。韓国学生によれば、韓国政府・メディアの報じる「独島」は、日本帝国による植民地化の一環として占領された島であり、非合法的な行為によるためその所有権は認められないという。日本のこの領土の所有を認めることは、非合法を認める事であり、特に帝国主義の歴史を是認する象徴的行為ともなるそうだ。日本政府は韓国でいう不法行為を合法的だとしているところに、領土問題の争点が見いだせるという結論に至った。「竹島」問題に関心な日本人学生も複数いたが、討論を通じて、この問題が国家による不正や人権侵害の象徴・結果であるという認識が得られて関心を持つようになった者もあった。

討論会では、互いの政府や多くの国民間の緊張関係を際立たせるような話題もあったが、全体を通して喧嘩もいがみ合いもなく、理解を深めて真摯に討論する姿勢が見られた。主催者側も敵対的でなくフランクな両大学学生の態度を評価していた。参加者は皆今後の友好関係に思いをはせながら、討論会後の立食パーティーへ向かった。

<English>

The English Group 1 discussed the topic “To what extent is armament justified in Northeast Asia today?” Members all agreed that in the most ideal world there should be no need of national armament and thus no armament whatsoever, but views diverged as we progressed to discuss practical perspectives. The four main topics of discussion were as follows: military conscription system, collective self-defense, citizen involvement in politics and territorial disputes.

The first practical issue raised was military conscription and its justifiability. This topic is controversial because in order to secure national security with military force, soldiers sacrifice their own security of life for that of other citizens. South Korea among other nations has military conscription system, a reality of mere one year away for some of the SNU students in the group. The mandatory service is two years in length and accompanies both mental and physical hardship; many young couples are said to break up during the period of military service of the male. One SNU student said “We advise Japan not take up the conscription system!” Though some Communitarians may argue that conscription is a way to equally imbue sense of responsibility among citizens, the reality in South Korea as said by Korean students was that most privileged classes have the means to be exempted from or reduce service length. On the other hand, as for the reason why conscription is

adapted in South Korea, students raised the following factors: that South Korea is still at war and require well-equipped military and that there are clear fiscal limits which impedes the government from attracting enough voluntary soldiers unlike in America. The group also mentioned the voluntary military enlistment system in America and other countries and how the poor are by far more likely to enlist and sacrifice their life for the rich.

As for national security in Japan, the topic of collective security was discussed. The group concluded that there are different dimensions to the acknowledgment of the right to collective security while media reports do not report some dimensions. In Japan, the advantages of the current political movements are emphasized; many Japanese students thought of exercising such right as a way to protect Japanese citizens abroad and help other countries. On the contrary, SNU students pointed out that nations such as China and North Korea see such change as a potential “threat” and thus the mobilization is further encouraged in the region.

After thus recognizing the differences in military systems and national security between South Korea and Japan, the discussion proceeded to compare the political decision-making processes in the two countries. To respond to a SNU student, Japanese students offered answers as to how citizens are involved in Japanese politics; in Japan, political talks are seen as inappropriate and the voting rate is as low as 30%. There is also a populist tendency of citizens to sway their likings owing to personal, and not professional, qualities of politicians and parties. The surprised SNU students described how voting rate in South Korea as 70% and people almost always have their own opinion on political issues. Such contrast is especially vivid among youth. In Japan, students are often politically apathetic or otherwise avoid joining social movements afraid of losing potential employment opportunities. Conversely, SNU students had friends who go to public demonstrations every week and themselves protested against US-SK FTA and other political movements. It was even said that some private enterprises would value students previously arrested due to political protests. It was discovered to our great surprise that while even Japanese adult protesters fear arrests and mass media do not report demonstrations in Japan, South Korea has much more political involvement of its citizens of various age groups.

Since incidences of national disputes are currently fuelling debate over military armament and national security, we have also discussed the territorial disputes between South Korea and Japan. Though almost all SNU students and UT students disagreed about the owner of the island and said it belonged to South Korea and Japan respectively, we were able to further our understanding. We eventually came to the understanding of a key clash point of the issue: whether Japan’s initial seizure of the island in question is justified. If justified, Japan owns the island and if not, then it does not – the latter contention proposed by the South Korean government and media. To many South Koreans including the SNU students, the acceptance of Japanese ownership of the disputed island is equal to accepting the injustice of imperialism of Imperial Japan, of which the island occupation is both a

direct consequence and a symbol. After the discussion, some of the Japanese students who were indifferent towards this issue became aware of the political and historical significance of the issue and became alert that it is an issue concerning national injustice and human right violation which all individuals should consider. During the discussion, there were some very sensitive controversial topics but we have expressed our views with considerate manner and never forgot to listen to each other with the eagerness to learn.

<日本語>

English 2 (E2) グループは、「慰安婦像をめぐる日韓の歴史認識の差異とメディア事情」というテーマで討論した。昨今、アメリカ・カリフォルニア州グレンデール市に、韓国系市民団体によって第二次世界大戦の従軍慰安婦被害を象徴する少女の像が設置されたことをめぐり、日韓両国の歴史認識のずれが露呈している。この問題を受け、日韓の近現代史における教科書の記述の相違、報道および各メディア間の差異、関係改善への展望を焦点に、活発な議論が行われた。

はじめに、近現代史の記述における日韓の差異が話し合われた。韓国では「恨」の感情が歴史認識に大きく作用していること、未解決の問題として、従軍慰安婦問題をはじめ、「高句麗」の歴史的立場づけをめぐる中国との領土問題などを重視することが提起された。さらに歴史教科書に関しても、韓国では近現代史が通常の歴史教科書の別冊をなしており、大きく取り上げられている。これに対し、日本では、歴史教科書における近現代史の範囲が限られ、入試問題にも出題が少ないため、学ぶ機会が積極的に設けられていないこと、そのためメディアの報道が若者たちの歴史認識に大きく影響していることが提示された。また、韓国からの留学生をはじめとして、外国人留学生らと従軍慰安婦問題を語ることはタブーと考えられがちと話す東大の学生もいた。

このような近現代史記述の比重の多寡を背景に、ソウル大の学生は、慰安婦像の問題をナチス・ドイツのホロコーストと同列に語りうる国際的な人権侵害としてとらえていることが指摘された。その基礎となる考え方として、日本人は軍の要請を受けて慰安婦の強制連行が行われたことを史実として認めるべきであり、日本政府はあらためて謝罪をし、過去の惨禍をくり返さないためにも、人権侵害の象徴として像の建設を認めるべきとの立場がある。これに対して東大の学生からは、1993年の河野談話を引きつつ、日本軍が慰安婦の強制連行を行ったとする公的書類が見当たらず、関係者の証言も曖昧であることから、事実検証のないまま像を建立する韓国系市民団体の意図を疑問視する声が聴かれた。

つぎに、第二次大戦後の両国における複雑な政治事情も話し合われた。韓国では依然として大戦で利益を得た日系の財閥が政治権力を握っており、日本への「恨」の感情が現政治体制への「恨」と相互に転化しうる背景がある。また日本では、戦没者である兵士が英霊として靖国神社にまつられ、韓国人にとっては断罪されるべき軍人たちが、国のために命を落とした日本国の守護神として奉じられる現状について論じた。このような議論の流れを受けて、ソウル大の学生から、首相の靖国参拝は公的にではなく私的に行うべきとの提案もなされたが、従軍慰安婦問題は二国間の問題を越えて公的に扱おうのかという問題も含め、国家の枠を越えて公的／私的の区別を設けるのは難しい。

そのうえで、慰安婦像に関連する問題を日韓のマスメディアはどのように報じたのか、

また SNS を中心としたインターネットユーザーの反応とは何かが議論された。韓国では慰安婦像の建立が大々的に報道されたが、この問題について日本における報道は少なく、問題意識が浸透していないように見受けられる。討議中にはメディア間の差異にまで話しが及び、マスメディアは事実を脚色してセンセーショナルに報道しがちである一方、SNS などでは、同じ信条をもつ人びとが繋がりやすいのではないかという提案がなされた。どちらにしても、偏向的な内容は流通しやすいため、情報が流通するプラットフォームの性質を視野に入れつつ、情報の取捨選択を自己判断で行う必要がある。

一連の議論を通じ、日韓の歴史認識の差異をうめ、両国の良好な関係性を構築するためには、あらためて両国の自己認識の手段について考える必要があると結論された。韓国では「恨」を基盤とする反日感情が、韓国の自国に対する意識のあり方に大きく作用している。しかし、他国の劣性と自国の優越性を強調することによって、健全に自国のイメージや国民のアイデンティティーが確立されるとは考えがたい。一方で、日本においても一部の偏向的な報道のために、現体制を批判しつつける非生産的な態度が推奨されたり、「責任」の所在を拡散する文化的風土があったりすることによって、自国を担う当事者となる意識が育ちにくい面がある。当事者としてバランスのとれた歴史認識をもつためには、日韓が協議の場を設け、互いの主観を共有しながら共同で歴史教科書を編んで行くこと、このプログラムを始めとするさまざまな水準での交流を、対面で進めていくことが重要だと考えられた。

<English>

The topic I presented in English 2 group was “Media differences between South Korea and Japan on understanding of “comfort women” in Glendale”. Because Glendale memorial honoring “comfort women” unveiled on July 2013 stirs controversy among citizens until recently, a lot of students from both countries have shown their interests on this topic. More than 10 students from both the Seoul National University(SNU) and the University of Tokyo(UT) joined our discussion group in order to think about how we are able to construct better relationship in the future through bridging the gap between our countries on historical understandings of “comfort women”.

First, we discussed the differences of stories in both South Korean and Japanese history textbooks. One of the SNU students suggested that the feeling of “恨(grudge)” has a huge impact on the construction of historical recognitions in South Korean culture. Moreover, he stated that South Koreans attach great importance to unsolved problems such as “comfort women” and territorial and historical dispute on “高句麗(Kokuri)” between South Korea and China. South Koreans have brought up modern history a lot as a separate volume of the ordinary history textbook, while descriptions of modern history in Japan has been limited and the entrance examinations offer few questions on this field. Since Japanese students do not have enough opportunities to learn some

issues originated in WWII, media reports greatly impinge on their ways of historical understandings. In addition, UT student expressed that she thinks it “taboo” to talk about “Comfort women” and other historical issues with foreign students including those from South Korea.

In proportion to the specific weight on modern history, SNU students tend to recognize “comfort women” issue as violation of human rights that can be talked at the same level of the Holocaust by Nazis. They also have a basic concept that Japanese government should admit the fact that the Japanese Imperial Army recruited approximately 200,000 women as prostitutes during WWII and installing the “comfort women” statue promote the Japanese politicians to apology for the mistreatment of women from South Korea, China and other countries. On the other hand, UT students mentioned that there are not any public documents, which testify Japanese military made South Korean women sex slaves of the Japanese Imperial Army. Therefore, they cast doubt on the intension of the South Korean City Council to build the statue without fact verification.

Moreover, we also discussed how Japanese and South Korean mass media reported the problems related to the “comfort women”. Although installing of “comfort women” statue was reported on a grand scale in South Korea, there were few reports in Japan about this problem, and an awareness of this issue does not have permeated. During the debate, there was the proposal that people who have the same principle are easily connected through SNS, while the mass media tend to dramatize the fact to report it sensationally. We need to select information by ourselves, considering the characters of each platform where information circulates, since partial contents are easy to be accepted.

Through the series of arguments, we concluded that it is necessary to recognize the means of the self-awareness in order to bridge a gap between Japanese and South Korean recognitions of history and to build a good relationship of both countries. In South Korea, the anti-Japan sentiment based on “恨” feeling greatly acts on the state of the self-consciousness to build the image of their own country. However, it is hard to think that a national identity can be established by emphasizing the recessiveness of a foreign country and the superiority of the own country. On the other hand, the unproductive attitude of criticizing an existing regime repeatedly and the culture that diffuses the locus of "responsibility" still exist even among Japanese intellectuals. For having the balanced recognition of historical understanding of this issue, Japan and South Korea have to share mutual subjectivity to make our own history textbook in addition to advancing exchange with the various levels including this SNU discussion program.

<日本語>

「東京大学・ソウル大学討論会」報告書

東京大学大学院総合文化研究科博士課程

IHS P2 特任研究員

具裕珍

メディアから毎日のように溢れ流れている日韓関係悪化のニュース、そのなかで開かれた東京大学とソウル大学学生討論会。どれくらいの人数が集まるのか、どのような話ができるのか、心配の方が先立った。しかし、同日参加した学生たちが各々34名（東京大学）、31名（ソウル大学）にのぼり、会場はにぎやかで、自然に挨拶したり、会話を交わしたりし、お互いに対し好奇心に溢れる穏やかな雰囲気を見て、私の心配は杞憂に過ぎなかったことがわかった。ここでは、当日、私が感じた全体的印象と特に私が参加した英語グループの様子を、短い文であるが、分かち合いたい。そして、そこから再び確信したのは、日韓関係における交流の大切さであることを強調したい。

第一に、討論会の全体雰囲気として印象に残ったのは、使用する言語の多様さである。昨年引き続き、今年も、日本語・韓国語・英語グループと分けてチームを組み、討論会が行われた。従来、日本で行われた大学生の交流が日本語を中心だったことと比べると、使用言語の多様さは学生たちの幅広い参加を促す効果をもたらす。その結果が上記したような参加者数とつながったのではないか。第二に、印象に残ったのは討論テーマの多様さである。従来の討論会が政治・歴史に集中し、焦点を合わせてきたとすれば、今回の討論会は、特に韓国語グループを見てみると、「韓国中高教育における漢字教育に対する提案」、「韓流ブームの傾向について」、「韓日両国の三放現象（結婚、恋愛、出産）」のような討論テーマが設定され、議論が行われた。

使用言語と討論テーマの多様さの観点から個人的に興味深かったグループは、英語グループ<チーム1>で、彼/女らの討論テーマは「National Security - How much armament is justified in Northeast Asia today?」であった。参加する機会が与えられ、時には厳しくなる、時には驚く、鋭い議論を隣で経験することができた。一人の報告者が討論テーマについて、報告し、それに従って議論が行われた。報告者は、国の安全保障と国際関係に関して、理論的かつ実証的枠組みを持って報告を展開させ、話をそらさないようにした。時間の制限のため、理論の話は大いにできなかったものの、具体的かつ実証の話は次々始まった。まず、印象的だったのは、学部生ではあるが示唆に富む事例や情報が挙げられた点である。「どれくらいの武装が北東アジアで妥当性を持つか」について、日本の学生たちは韓国の徴兵制や米韓同盟、北朝鮮との関係などが、韓国の学生たちからは最近話題になっている安倍政権の集団的自衛権をめぐる議論などがお互いの主張を裏付ける事例として

挙げられ、議論のレベルの高さを感じさせた。次に印象的だったのは、やはり日韓の歴史認識の差であった。東アジアでの安保の話であったが、それが自衛のためかどうか、妥当かどうかを分けるのは過去の歴史認識の差から起因したのである。しかし、最後に一番印象的だったのは、このような認識の差が議論を重ねるにつれて相互理解につながることであった。重要なのは、差異は存在しているとしても、相互理解は深まることができることである。一例として、安保の話のなかで領土問題が挙げられたが、話し合いを通してお互いを理解する姿は感動的でもあった。日本の学生たちは韓国の学生たちの話に耳を傾けて、「どうでもいいと考えたが、韓国側の話を知ったら、理解できるようになった」とか、韓国の学生たちは日本の学生たちの話を聞いて「日本側の話を知ったら、韓国で考えたことと違ったりして、日本側をもっと理解できるようになった」ともした。

2014 東京大学・ソウル大学学生討論会が終わり、私の懸念は杞憂に終わった。多くの方が日韓関係を懸念していたが、学生討論会は希望の光が見えたとも言えるほど有益な時間であった。何よりも両大学の学生たちはお互いに対して耳を傾けたことである。自分の話ばかりではなく、相手の話をよく聞く姿が一番印象的であった。厳しい話であっても議論を通してお互いに理解を深めることも印象的であった。討論会の後で行われたレセプションで、笑いながら話したり、連絡先を交わしたり、後でまた会うのを約束したりする、「友達」になった彼/女らの後ろ影を見るのは、このような交流の大切さをもう一度確信させる場面であった。

<English>

Looking back on SNU in Tokyo Discussion Program 2014

Research Fellow at IHS P2

Yoojin Koo

In the midst of overflowing media covers about worsening relations of Japan and Korea in recent years, the Discussion program for students from Seoul National University(SUN) and the University of Tokyo(UTokyo) was held. At first glance, concerns like how many students could gather together, what kind of topics we should talk about, etc. came across my mind. However, on that day, as witnessing that student participants climbed to 31 from SUN and 34 from UTokyo, respectively, and naturally started to greet each other, exchange conversation, and look at each other with curiosity, my concern tuned out to be unfounded. Here I would like to share my impressions about the discussion event overall and discussion of English team one in which I participate in particular. And

this led me convinced again of the importance of exchanges in Japan-Korea relations.

Firstly, what was impressive was a variety of the languages that students could use for discussion. Following the last year, students were grouped by Japanese, Korean and English teams. Compared to other exchange programs among university students carried out mostly in Japanese, one of strengths of this event, language diversity, encourages a broad range of participation. This strength might result in the number of participants as described above. Secondly, I was very impressed with a variety of discussion topics. Again, considering that topics of previous exchange programs concentrates on politics and history, we can see its variety; it is obvious when we take a look at topics of Korean teams --- “Proposals for Chinese-character Education in middle and high schools in Korea”, “Trends of Hallyu (Korean Wave)”, “Phenomenon of Giving up THREE(marriage, dating, childbirth) in Japan and Korea.”

Based on such perspectives as varieties of language and topic, the team one from English group was attractive to me and their discussion topic was about “National Security - How much armament is justified in Northeast Asia today?” Fortunately, a precious opportunity to take part in the team was given and I was able to experience to witness their occasionally sharp and occasionally surprising discussion. Discussion time was composed of one presentation and discussion for the rest. A presenter proposed a theoretical and practical framework for international relations and national security, so that discussion should not wander from the topic. Due to a time limit, they could not deal with the theoretical framework profoundly, but could touch upon empirical cases intensively. First, impressively, they were well informed with current affairs and thought-provoking information in taking them as undergraduate students into account. Under the discussion topic, Japanese students raised issues like US-ROK alliance, conscription system of South Korea, relations with North Korea, etc., while Korean students took up issues as exemplified by the right of collective self-defense of the Abe administration. Discussion around these issues made me feel as if I were in graduate seminars. Next impression was, as one can expect it, the gap of historical consciousness existing between the two. Although security issues lied as a central topic, whether the armament is for self-defense and whether it is justified were determined based on how they see their past. However, lastly and most impressively, exchanging conversation and sharing ideas and opinions in discussion time seemed to deepen mutual understanding despite the gap of historical consciousness. For instance, when territorial dispute was raised, it was truly touching that they came to understand each other after long discussion. One Japanese students said, “I didn’t care about territorial dispute, but after I listened to Korean students, I was finally able to understand that it mattered to Korean people,” while Korean students said, “By talking with Japanese students, I found out there were many aspects unlike what I had thought in Korea. And it helps us to understand better.”

With the end of 2014 Discussion Program of SUN in Tokyo, my concerns flew out of the window.

Many people have been concerned about the Japan-Korea relations, but in the midst of it, student discussion time was valuable even to see the light of hope. Most importantly, I was moved that students from both universities listened to each other with careful attention, rather than just arguing their thoughts solely. In spite of sensitive issues, they came to reach a better understanding through discussion with enthusiasm. At the reception, as watching that they talked with a laugh, asked for contact numbers, made appointment to hang out, --- which they were becoming “friends” ---, I was reassured that exchange programs as such were extremely essential for Japan-Korea relations.

<日本語>

「東京大学・ソウル大学討論会」報告書

東京大学大学院人文社会系研究科日本史学修士1年
アンジェイク

私は現在、東京大学の人文社会系研究科日本史研究室所属の修士1年生、アンジェイクと申します。今回の討論会には、バイトとして準備作業に参加することになりましたが、日韓両国の学生たちの熱い討論に参加することができて、とても幸いだと考えています。

自分はバイトを始める前には、この行事については何も知らなかったのですが、去年から準備をされてきた長澤先生以下スタッフの皆さんからの指示に従って何とか事前準備を完了することができました。

準備過程で最も惜しかったところは、討論参加者さんたちがたくさんやってくる時に自分がうまく対応できず、慌てていた事でした。幸いに、周りの他のスタッフさんたちからのご協力で、問題なく討論が始まったのですが、受付の経験が少ない自分のような人間にとっては、多数の参加者を引導する方法を事前に準備して、熟知する必要があると思います。そのためには、初心者用の「マニュアル」的なものが必要かも知れませんが、そして、討論会が行われる会場の準備する時間が、また自分の未熟さのせいだと思いますが、少しは足りないと感じましたことも残念だったのです。それで、もしスタッフの役割が受付・会場の準備・討論の補助などで区分され、それぞれの役割に集中するように仕事が分断されれば、より効率的な討論会になりうると思いました。

討論の方は大変よかったと思います。論題別に七つのグループに分けて、それぞれのグループでとても活発に討論をされている参加者の皆さんの熱情にとっても感心しました。私は残念ながら、会場の準備のせいで討論のないようをそこまで深く聞いてみる機会はありませんでしたが、韓国語で行われた韓流ブームについての議論を少しだけ聞かせて頂きました。日韓両国の活発な文化交流の体表的な事例である韓流ブーム、最近は残念ながら、4～5年前よりは下がってはいると認めながらも、これからの両国の交流を活発化するためには、どのような努力が必要であるかについて、参加者さんたちは熱く議論されていました。他のグループにおいても、これに絶対劣らないほどの素晴らしい議論があったはずだと私は考えています。

しかし、ちょっと残念なのは、そのような立派な議論が、自分のグループの中でのみ共有され、他のグループの参加者さんたちと議論の内容を話し合う機会を持つことがなかなか難しかったことでした。最初に討論のテーマについて簡単な説明があり、討論がすべて終わったあと、そのグループで議論された内容を他の参加者にも伝える公式的な発言機会があったのですが、進んで、お互いの討論のテーマや内容について評価したり、一緒に考

えてみる機会がもっとあったらどうかと考えました。そして、せっかく国境や言語などの壁を乗り越えて話し合う機会を得たから、一つのみならず、より多様な話題についてのお互いの考え方を知ることも大事だと思います。そのためには、討論を二つ位のセッションとして区画して、参加者さんたちがおのおののセッションで一つの討論に参加して、総計2つ位の討論に参加することができるようすることも一つの方法として、可能ではないでしょうか。

初めて参加した今回の討論会は、自分の未熟さのせいもあったのですが、所々少し残念なところが絶対ないわけではなかったと思います。それにもかかわらず、参加者の皆さんがみせてくださいました熱意と高い水準の討論の内容にとても感心しました。このような行事がこれからもどんどん多くなることを祈願します。

<한국어>

‘도쿄대학교/서울대학교 학생토론회’에 참가하고

인문사회계연구과 일본사학 석사
안재익

저는 지금 도쿄 대학교의 인문사회계연구과 일본사 연구실 소속인 안재익이라고 합니다. 이번 토론회에는 스텝으로 참가하여 행사 준비 작업을 하였습니다. 한일 양국의 학생들이 열띤 토론을 하는 행사에 참가하게 되어서 아주 기쁩니다.

이번 행사에 참가하기 전에는, 저는 행사에 대해서는 아무것도 몰랐기 때문에 토론회 당일이 되어서도 무엇을 준비해야 할지 잘 모른 채 헤매고 있었습디만, 작년부터 행사에 참여해 오신 다른 스텝 분들의 지도와 격려가 있어서, 다행히 무사히 행사를 준비할 수 있었다고 생각합니다.

준비 과정에서 가장 아쉬웠던 부분은, 토론 참가자 분들이 한꺼번에 몰려오는 때에, 제가 적절하게 대응하지 못하고 당황했던 부분입니다. 다행히 주변의 스텝 분들의 도움으로 큰 문제 없이 넘어갈 수 있었지만, 접수를 해 본 경험이 적은 저 같은 사람은, 많은 분들이 오실 때 어떤 절차와 동선에 따라 그분들을 인도할 것인지를 사전에 정해서 기억해 둘 필요가 있었다고 생각합니다. 저 같은 초심자용 ‘매뉴얼’ 같은 게 있었다면 더 좋았을지도 모르겠군요. 그리고 물론 제가 미숙한 탓이 컸을 테지만, 토론회장을 준비하는 시간이 조금 부족한 것 같은 느낌이 들었던 것도 아쉬운 부분이었습니다. 만약에 스텝들이 각각 접수/회장 준비/토론 보조 같은 특정한 역할에 따라 배치되었다면(인원이 더 필요하게 될지도 모르겠습니다만) 좀 더 효율적으로 토론회를 준비할 수 있었을 것 같습니다.

실제 토론 내용은 정말 훌륭했다고 생각합니다. 논제 별로 7 개의 그룹으로 나뉘어서,

각 그룹별로 아주 활발하게 토론을 하셨던 참가자 분들의 열정은 아주 놀라웠습니다. 저는 안타깝게도 회장 준비를 하느라 토론 내용을 상세히 들을 기회는 없었습니다. 그렇지만 한국어로 진행된 한류 붐에 대한 논의를 조금이나마 들을 수 있었습니다. 한일 양국의 활발한 문화 교류를 상징하는 한류 붐이, 4~5년 전에 비해 최근에는 약간 침체되고 있다는 것을 인정하면서, 향후 양국간의 교류를 활성화시키기 위해 어떠한 노력이 필요한지에 대해 참가자들은 활발히 토론하고 있었습니다. 다른 그룹에서도 이에 못지 않은 훌륭한 논의가 있었을 것이라 생각합니다.

하지만 약간 아쉬웠던 점은, 이렇게 훌륭한 논의의 결과물이 각각의 그룹 안에서만 이야기되고, 다른 그룹의 참가자들과 토론 내용에 대해 서로 이야기 할 기회를 갖기 어려웠다는 것이었습니다. 토론이 시작되거나 끝날 때, 각자의 주제와 토론 내용에 대해 간략히 이야기할 기회가 있긴 했습니다만, 서로서로 토론의 내용에 대해 평가를 내리거나 의견을 주고 받는 좀 더 활발한 논의의 장이 있었으면 좋겠다고 생각했습니다. 그리고 이번 행사는 국경이나 언어의 장벽을 넘어 함께 이야기할 수 있는 아주 좋은 기회인 만큼, 참가자들이 하나의 주제에 대해서만 이야기하는 것이 아니라, 더 많은 토론에 참가할 기회를 부여해서, 다양한 주제에 대해 상대방의 생각을 이해할 수 있도록 하는 편이 좋다고 생각합니다. 토론회의 구성을 두 개 정도의 세션으로 구분해서, 참가자들이 각 세션마다 하나씩의 주제를 선택하도록 한다면, 지금보다 더 많은 주제의 토론에 참가할 수 있을 것이라 생각합니다.

이번 토론회에 처음으로 참가하게 되었는데, 처음이라 그런지 역시 저는 많이 부족했다고 생각합니다. 그 탓인지 모르겠으나, 토론회 준비나 진행에 있어서도 부족한 부분이 전혀 없었다고는 하기 힘들 것 같습니다. 하지만 그럼에도 불구하고 참가자 여러분들이 보여 주신 열의와 수준 높은 토론 내용에 정말로 감탄했습니다. 앞으로 이러한 행사가 더욱 활발해지고 많아지기를 기대합니다.